

カルマ・チャクメーの極楽願文 『清浄大楽国土の誓願』の和訳と研究

——序分と礼拝対象の無量光仏の段——

藤 仲 孝 司

【抄録】

カギュ派、ニンマ派の学者・行者カルマ・チャクメー（ラーガアスヤ、1612–1678）著『大楽誓願』は、ゲルク派の祖ツォンカパ（1357–1419）著『最上国開門』とともに、チベット仏教における最も高名で普及した極楽願文であり、宗教的だけでなく文化的にも重要である。チャクメーの極楽願文は、彼が指導した活仏ミギェル・ドルジェ（1645–1667）が無量光三尊を見て教えられたという埋蔵経「虚空法（天空法）」に所属しており、それらの儀式や法要において大きな役割を果たすとともに、宗派や儀式を越えて広く用いられた。本稿においては、中御門敬教氏との協力のもと、この極楽願文の概説を行い、序分と観想、礼拝対象である無量光仏に関する部分を、翻訳研究した。

キーワード：カルマ・チャクメー（ラーガアスヤ）、極楽願文、虚空法、『清浄大楽国土誓願（大楽誓願）』、ミギェル・ドルジェ

序論

チベットでは僧俗を問わず阿弥陀仏や極楽浄土への信仰が盛んであるが、極楽願文として有名であり僧俗に普及したものに、ゲルク派の開祖ツォンカパ・ロサンタクパ（Tsong kha pa Blo bzang grags pa. 1357–1419）著『最上国開門 *Zhing mchog sgo 'byed*』と、カルマ・チャクメー（Karma Chags med. 1612–1678）著『清浄大楽国土の誓願 *rNam dag bde chen zHING gi smon lam*』、略称『大楽誓願 *bDe chen smon lam*』という二つがある。『最上国開門』の内容は『無量寿経』に基づき、極楽往生の原因を四つ一すなわち 1）阿弥陀仏とその極楽浄土の形相をたびたび作意すること、2）福德の資糧を積むこと（および罪惡を浄化すること）、3）正覚へ発心すること、4）善根を自他が極楽に生

まれる因として廻向すること―にまとめて提示したものであり、少し簡略な読誦版も存在する。この願文はおもにゲルク派に影響を及ぼした。他方、『大楽誓願』¹⁾は、カルマ・カギュ派とニンマ派の伝統に所属する学者・行者カルマ・チャクメー²⁾の著作である。チャクメーは、特に密教を重要視するカギュ派の人であったが、この願文は密教の師資相承を離れたものになっており、広く普及した。こうして、この極楽願文はチベットの仏教だけでなく文化を理解する上でも重要な典籍となったのである。

『最上国開門』には幾つかの翻訳研究があるし³⁾、『大楽誓願』はさらに古く宗川宗満、青木文教により翻訳されている。近年では Peter Schwegler によるドイツ語訳があり、幾らか言及した論文⁴⁾があるが、あまり知られていない。中御門敬教氏と筆者はチベットの浄土教を研究するなかで、この『大楽誓願』に注目して研究し、一部その成果を発表した⁵⁾。今回試みるのは、『大楽誓願』をその註釈書、関連著作を参照することにより、正確に翻訳し、内容を理解することである。基本的には中御門敬教氏と

1) 題名のうち、「大楽 (bde chen, mahā-sukha)」は後期密教に多く用いられる用語であるが、チベットでは発音が近いこと、意味が似ていることもあってか、極楽 (bDe ba can, sukhāvātī) の代わりに用いられる事例がある。特に、顕教哲学を重要視しないニンマ、カギュの系統における用例である。

この願文は、大谷大学名誉教授ツルティム・ケサン先生によると、現在でもニンマ派、カギュ派などの人々の間で盛んに唱えられている。さらに、ゲルク派の学僧でジャムヤンシェーパ2世の勅めもあってタシキルの僧院長となったギェル・ケンポ・タクパギェルツェン (rGyal mkhan po Grags pa rgyal mtshan. 1762–1837) は極楽願文を著しており、その願文には何ら明記はないが、中御門敬教氏の研究によると、チャクメーの『清浄大楽国土の誓願』の抜粋版とも言えることが判明した。宗派を越えたこの編纂本の成立も、この極楽願文が広く普及したという背景なしには考えられない。cf. 中御門 [2009]

2) サンスクリットを用いて Rāgasya と呼ばれる。この名に関する問題については、藤仲 [2006] p. 52 note 2 を参照。チャクメー (chags med) のチャク (chags) が、ラーガ (rāga) に対応しているが、「ラーガスヤ」という場合の原意は不明である。彼の浄土思想の一端については同論文に示した。『山法・独居修行の教誡』はカルマ・チャクメーがその弟子に対してカギュ派の行法を広く扱った典籍であるが、その中の第42章は、輪廻の苦、今生の無常を思うなら、死後にどこに生まれるべきかを選択すべきであることを説く。そこでは、諸々の仏、菩薩、成就者たちの浄土、聖地に言及しながら、最終的に西方の極楽浄土こそを選択し、行者は自らの対象としても阿弥陀仏と観自在菩薩こそを志願し、成就すべきであると教えている。

3) 例えば、小野田 [1981]; 同 [2000], Thurman [1982], 釈舎 [1985], 梶浜亮俊「ツォンカバ著『極楽への誓願文』の研究」(『大阪工大摂南大学中研所報』23-3, 1991; 後に梶浜 [2002] に収録), 武内・ツルティム・小谷・櫻部 [1993] (ツルティム・ケサン, 小谷信千代「チベットの浄土教」) がある。釈舎論文は漢訳『極楽願文』(『大正蔵』19, No. 935達喇嘛嘎吐楚薩木丹達爾吉訳) がこの読誦版の漢訳であることを解明した。

4) 宗川 [1923], 青木 [1928] pp. 117–129, Schwegler [1978]; 青木訳は未見であるが、宗川訳とともにチベット研究としては早い時期の業績である。ただし、宗川訳は翻訳のみであり、典拠の提示は何も無く、詳細な内容の把握に問題が残る。Schwegler の著作はテキストの校訂を行い、著者チャクメーの所属した「無宗派運動」にも言及した重要な著作である。ドイツ語の著作であるため、活用しがたいが、同書の目次については、中御門 [2009] pp. 254–256 note. 13 を参照。

5) cf. 藤仲 [2006], 中御門 [2009]

の共同研究であるが、分量が大きくなるので、数回に分けて発表する。この論文では、願文全体の序分と、七支供養の礼拝の対象としての無量光仏を記述した部分を扱っている。

カルマ・チャクメーについては藤仲〔2006〕に紹介したが、もう一度概略を示すと、彼はカルマ・カギュ派とニンマ派の伝統に属する学者・行者である。顕密の多くの著作を残したほか、同派の若き活仏ミギュル・ドルジェ（Mi'gyur rdo rje. 1645–1667）⁶⁾を指導し、彼との関係において、阿弥陀仏や極楽浄土を多く扱った埋蔵経⁷⁾「gNam chos

6) 彼はカム地方の Zal mo sgang に生まれた。パドマサンバヴァの弟子の生まれ変わりとされ、カルマ・カギュ派のマハー・ムドラー（大印）の継承者、ニンマ派の大究竟（ゾクチェン）の成就者でもある。彼の早世後に編纂されたチャクメー著『大楽国土への遷移の教誡を広く編纂したもの』によると、彼はパドマサンバヴァの五部埋蔵経（bKa' thang sde lnga. オギエン・パドマリンパが発見した）の一つ『王の遺教』（rGyal po bka' thang）などにその出現が予言され、その過去世に修行を重ね、未来世に成仏するという。彼が13歳のとき（1657年）夢に無量光三尊を直接に見て、『大楽国土の成就法』『夢に大楽国土に会う方法』『無量光の寿命の成就』『大楽国土の遷移』『大楽国土の祈願』『大楽国土の誓願』『大楽国土の灌頂』と『夢を捉えた祈願』『教誡』を授けられた。これは遷移（ボワ）の法のなかでも新しく加持が大きく、パドマサンバヴァによる怠惰な者のための教誡、臨終時に罪人も成仏できる強烈な法であり、利徳が大きいとされている。彼の教えの最も有名なものは、上記の無量光仏から授かった教えであり、それらはわずかに四偈頌かそれに満たない短い三種類の願文である—それらは、大乘の仏道修行全般に言及しつつ、臨終時に来迎を受けて、極楽往生して見仏すること、神通変化により利他を行うことを祈願している。それに対して、チャクメー（彼は「埋蔵経の大臣」とも呼ばれ、その主導的立場がうかがわれる）が註釈を著したり、行法として編纂している。埋蔵経発見者ドゥドゥル・ドルジェ（gTer ston bDul 'dul rjo rje, 1615–1672）とも親交をもった。

7) gTer ma は文字通りには「秘蔵されたもの」といった意味である。日本語では多く「埋蔵経」と翻訳されているが、山中や地中や仏塔の中に埋蔵されたものだけではなく、水中や虚空または弟子の心の奥底に秘蔵されたものをもいう。聖者や成就者、チベットでは多くの場合、パドマ・サムバヴァ（ニンマ派の開祖であり、その不思議な呪術力によりチベット仏教圏で広く信仰されている）やその弟子により秘蔵され、守護神により守られたものが、後の時代に、後世に洞察力あり使命を帯びた人が、ダーキニーなどの助力によりそれを発見し、それを人間の言語で示して、理解できるようにしたものである。このような発見は、長い期間にわたってニンマやカギュの様々な人々によりなされた。彼ら発見者はしばしばそれら典籍において予言されており、gTer ston とか gTer chen と呼ばれる（ston は教師、chen は大なる者という意味である）。そのなかには、何らかの活仏とされる人や彼に関係する人、あるいは何らかの成就法を実践してその尊格を成就した人が多い。cf. 安田〔2008〕p. 60

また西岡〔1978〕pp. 8–9には、チョーキセンゲ（19c 後半–20c 前半）著『シチェ派仏教史 Zhi byed dang gcod yul gyi chos 'byung Rin po che'i phreng ba Thar pa'i rgyan』に基づいて、「天空の法 gNam chos」は「地の法 sa chos」に対する概念であり、インドで雨として降った法の伝承、すなわち四部の法輪とタントラのすべての伝承が「天空の法」である。「地の法」はすべての埋蔵経（gter ma）であり、それは菩薩たちが衆生利益のために遺したものであり、現実には地下に埋蔵されたものと、成就者が心の法界において得た対象としてのものとの二つに区別できる。後者は dgongs gter（意趣の蔵）といわれるものである、などと言われている。それからすると、「虚空の法」「天空の法」というのはきわめて高い位置付けがなされていることになるが、言葉の指示内容を考えるなら、「地の法」とさほど大きな違いがあるようには思われない。

具体的に有名な埋蔵経としては、Bar do thos grol（いわゆる「死者の書」）がある。秘匿された典籍の発見ということ、私たちは自作の著作を過去の偉人の名声を借りて権威づけたも

(虚空法, 天空法)」あるいは「gNam chos bDe chen zhing sgrub (虚空法一大楽国土の成就)」⁸⁾の発見, 編纂を行った一彼の法統の人々は, 後に「無宗派運動 Ris med」を形成し, そこでも阿弥陀仏の信仰が盛んに宣揚された⁹⁾。この法類は幾つもの成就法,

の, あるいは仏敎という圧倒的価値体系の中での創作活動を考えがちである。そのような側面も否定はできない。顕敎哲学に詳しい学僧から見ると, 経典や論書に関する無知からでっち上げられたと思われる内容もあり, またその発見が人々を集めるための一種の見せ物となった事例も, あったようである。cf. ツルティム [1990]; とはいえ, 真摯な人たちと良質な典籍が全く存在しなかったわけではない。彼らはそれら典籍を, 昔の成就者から開示された真正なものと考えており, 後にその伝統を形成した事例が幾つかある。かつて大部の般若経が釈迦牟尼仏により説かれた後, 埋没し地下の龍の国に秘蔵されて, この世界には無くなっていたが, 後にナーガールジュナが龍の国を訪れて, それを人間界に持ち帰ったとされる話, 〈華嚴経〉上本・中本は龍宮に秘されており, 龍樹がそこで披見したという話, アサンガが三昧を成就して兜率天に住する弥勒菩薩から法を聞いて五部の典籍を伝えたという話, 龍猛(龍樹)が南天竺の鉄塔を開き, 金剛薩埵から真言秘密法門を授かったという伝承など, その大きさや後世への影響や範囲は異なるけれども, 大乘仏敎の重要典籍における事蹟 (cf. 鎌田 [2006]) と共通する点がある。ともあれ, インド後期大乘仏敎以降, 密敎の影響下に仏菩薩の成就法が実践され, 成就者たちが登場するようになって以降, このような事例は増加した。例えば, マイトレーヤの成就者であったマイトリーパにより, 『宝性論』や『法法性分別論』が古い壊れた仏塔の中から再発見され宣布されたということもまた, 「gTer ma」の発見と言えるであろう。『宝性論』は大乘の仏性思想に関する最も重要な典籍であり, 古く漢訳されたが, インドでは長らく埋没していたので, 「創作」ないし「捏造」ではなくまさに「再発見」であったからである。彼からの『宝性論』の伝統はチベットに伝えられて, カギユ派のいわゆる「大印契」の伝統ともなった。また, これは「埋蔵経」とは呼ばれないが, 中観と因明を融合させたツォンカバ・ロサンタクパの哲学でさえも, その核的な内容について文殊菩薩の成就法を実践してからその文殊菩薩に自らの疑義を問いただし, 自らの著作の意義について躊躇ったときにも文殊菩薩に勧められて著したことが伝えられている。

- 8) gNam chos 自体はミギルドルジェの全集(末尾の資料を参照)を見ると, 様々な尊格と儀軌に関する広大な法類を指すようであるが, 一般的には直ちに『大楽誓願』を連想させるほど, 諸々の仏と国土の中より阿弥陀仏と極楽への往生を選択した信仰と実践として知られている。Kapstein [2004] は, チベットの浄土思想全般を扱った本格的な論文であり, gNam chos (虚空法)の文献類についても pp. 32-37に独立した一項目として議論しているが, そこに扱われたものも阿弥陀仏関連のものに限られている。ちなみに, ツルティム・ケサン先生によると, gNam chos (虚空法)とは, 題名のとおりの天の虚空に秘蔵されていた聖典が人間界に舞い降りてきたものである。天から典籍が降ってきたという事例としては, 古くは観自在菩薩の六字真言の典拠として有名な *Kāraṇḍavyūha* (東北 No. 116 Ja, 大正 No. 1050) が, 仏敎伝来以前のチベットに天空から降ってきたとされている事例 (cf. 藤竹 [2006] p. 73 note 75) もあるし, 先生のお話では中国軍によるチベット侵攻の直前にもそれを警告する紙片が天から降ってきたと言う話がある。そのお話からは, かつて日本でも幕末に, 民衆が「お陰参りでええじゃないか」と歌い踊り, 大挙してお伊勢参りに出たとき, それを勧めるお札が天から多数降ってきたという事例が連想された。ちなみにツルティム先生は, 故郷の西チベット, シェーカーでゲルク派の寺院で出家する前の子ども時代に, 地元のニンマ派の僧侶のもとで学んだとき, この『清浄大楽国土の誓願』を教えられ, 暗記したということであり, 冒頭部分を唱えてくださったことがある。先生は, ゲルク派の学僧出身ということもあって, ニンマ派の敎義や信仰について批判されることが多いが, この極楽願文については著者が菩提心を持った人であったとお考えのようであり, 自ら供養のために唱えることがある, と仰った。
- 9) 彼らの法はカルマ赤帽ラマとカルマ黒帽ラマの系統に継承されて, 特にシトゥ 9 世パドマ・ニンチュエーワンポ (1774-1853) により広められた。彼の弟子にはコンツェル・モンテン・ギャムツォ (1813-1899) がいる。さらにこの法統には, ジュ・ミバム ('Ju Mi pham. 1846-1912), ドッドゥブ・リンポチェ 3 世 (rDo grub rin po che, 1865-1926) などが出て, 彼らはいずれも「無宗派運動」に関係し, そこでもまた幾つもの極楽願文が著わされた。詳しくは, 梶浜↗

供養法、葬儀作法を伴ったものであり¹⁰⁾、それら実践や儀礼の最後に読誦されて重要な役割を果たすのが、この『大楽誓願』である。またはそれら儀礼を離れて単独でもさかんに読誦される。チャクメーは簡略な極楽願文を他にも著しているが、最も重要なのがこの願文である。この願文は冒頭に、この教えは最高の教えであり、自己の教えの根本であると述べている。そして、「経（mdo. 顕教）の宗」だから灌頂、伝授などは必要ないと述べており、求める人には経本を与えるように勧めている。刊本は頁数などは一致するが、奥書の異なった別の版のものがあつた、この願文の宗派、伝統を越えた流布が推測できる。註釈書としては、ジクメー・チョデンパ（'Jigs med chos ldan pa. 19c）ないしトゥクジュ・シャンペン・ペルサン（Thugs rje gzhan phan dpal bzang. 生没年未詳）による大著『清浄大楽国土の誓願の弁別釈・大楽国土へ往く善き階梯』（以下、『弁別釈』と略称する）¹¹⁾と、ラクラ・ソナム・チュドゥブ（Glag bla bSod nams

↘ [2002] pp. 228ff. を参照。

ニンマ派、カギュ派の人々は一般的に顕教哲学の修学を重視せず、密教の実践に専念する。しかし、カギュ派の一人ガムボパの弟子や孫弟子の中には、すでに顕教の面から阿弥陀仏への信仰や極楽往生への願いを明確にした願文を著した人たちがいた。ニンマ、カギュの両派はやがて混淆することにもなり、ゲルク派の学問仏教が盛んになった時代のなかで、より民衆に近い部分で活動したが、ニンマ、カギュの両派ともに埋蔵経の発見、伝承に関わった。そのなかで「無宗派運動」が形成され、自他宗派の偏りなく教えを学んで活動し、大蔵経の開版などを行った。埋蔵経の多くは、チベットに密教を伝えて後に神格化されたパドマ・サンバヴァやその弟子たちのものとされている。また彼自身は阿弥陀仏の化身とされ、広く民衆に信仰されたこともあって、埋蔵経に関わる人たちは、密教の典籍や伝統よりむしろ『無量寿経』など顕教の経典に、その教義の基本を求めた。その流れのなかでゲルク派のツォンカパの極楽願文『最上国開門』も受容された。例えば、ニンマ派の活仏ペルトゥル・リンポチェ（dPal sprul rin po che. 1808-1887）は、自らの極楽願文を著したほか、gNam chos（虚空法）の法類の阿弥陀仏に関する教えを自著 *Kun bzang bla ma'i zhal lung* に取り入れており、これはニンマ派に大いに流行したが、彼自身はツォンカパの極楽願文、チャクメーの極楽願文の両者を学び、両者の科文をも著している。

またこれらの人々には、極楽往生のための四つの因というまとめ方も継承されている。「無宗派運動」に関わった人たちの著作として極楽往生の四因を扱ったものには、ジュ・ミーバム（1846-1912）著『極楽願文』、『極楽国土を浄める信を明かすもの—仙人の教えの太陽—』、ジクメー・テンペーニマ（1865-1926）著『極楽願文』、タラク・チャンチュブドルジェ（20c）『四因を通して大楽国土に生まれる誓願—一切相智の賢道—』などがある。

10) それに関する文献類を調査した結果は、参考資料として提示しておく。そこには願文、前行の法、建白文、供養法、灌頂などが含まれている。cf. Kapstein [2004] pp. 49-50

11) *rNam dag bDe ba chen zhing gi smon lam gyi 'byed 'grel bDe chen zhing du bgrod pa'i them skas bzang po*』Toh. No. 7019; Toh. の番号は、東北大学所蔵チベット蔵外文献 金倉円照等編『西藏撰述仏典目録』（1953）によるものである。『弁別釈』については、小野田 [2000] p. 3に言及されている。これは金倉円照等編『西藏撰述仏典目録』にもラーガアスヤ著とされているが、奥書の記述や本文中に先人であり第三者としてチャクメーが言及されていることから、ラーガアスヤ自身のものではないと考えられる。すなわち、著者をジクメー・チョデンパとする奥書の書き方（和訳『浄土教典籍目録 パイロット版』（2010、佛教大学総合研究所）p. 86）、また著作の冒頭の「カルマ・チャクメーのお顔の妙瓶から来る極楽願文の弁別釈—自他への利益の願望をもって、無比の師の口伝をここに提示する」（1b4-2a2）、「カルマ・チャクメーは聖者観自在そのものであるから」（45a2）、「かつてケードゥブ・カルマチャクメーが」

chos 'grub. 1862-1944) による大著『大楽国土誓願の復注—解脱道を照らすもの（太陽）—』¹²⁾がある。今回はおもにジクメー・チョデンパの註釈を参照し、この法統の解釈が分かるようにできるだけ訳註に取りあげた。ジクメー・チョデンパはネード(gNas mdo)のカギュ派、ニンマ派の僧である。彼の註釈は、願文を引用しつつ、詳しい説明や因縁譚など関連事項を加えている（ラクラソナム・チュドップの註釈もこれを参照し、ここから展開している）。残念ながらこの註釈は標準的でない表記や誤字が多くて読解困難な個所が少なくないが、簡潔な願文自体から分かりにくい構造や関連内容を明らかにし、この法統のより古い考え方を伝えている。

全体の構成は、願文自体においてはさほど明瞭ではないが、ジクメー・チョデンパは、『無量寿経』によるツォンカバ著『最上国開門』に倣ったのか、上記のように極楽往生の四つの因を明らかにするものとしている。本年度の藤仲論文と中御門論文ではそのうち、第一の因と第二の因の途中までを扱う。

第一の項目では、まず阿弥陀仏とその眷属そして極楽浄土の徳性と救済性を明らかにする。その上で第二の項目において、礼拝・供養・懺悔・随喜・勧請・祈願・廻向という七支供養を行う¹³⁾。ジクメー・チョデンパは、それら七支は各々、慢・貪欲・瞋恚・嫉妬・愚痴・邪見・疑の対治としているが、そのような配当は他に類例がないようである。七支のうち、礼拝の支分は、阿弥陀仏の名号を念じ、それを聞くことの利徳を通じて行われる。懺悔の支分は、『註釈』によると〈説四法経〉所説の対治現行・能破・回復・依処の四力¹⁴⁾を通じて行われるが、きわめて詳細であり、この願文

「浄土から来られて、近住〔の弟子たち〕を導いた経緯のように」（66a5-6）、「チャクメーのこの『極楽願文』とパンチュン〔1世〕が造られた「欺き無き〔三〕宝」〔といって始まる願文〕」などと、第三者としてのチャクメーに言及する文言が見られる。それらチャクメーへの尊崇や、彼の指導下のミギル・ドルジェがもたらした埋蔵経『虚空の法 gNam chos』を教証とし（9a2）、カルマ・チョサンによる刊行時の奥書には「この誓願は「虚空の法・大楽国土の成就」から抽出した。」といい、「大楽国土の成就」文献を原典としていることから、著者はチャクメーの法統に連なる人である。またニンマ派のカトクバ・ダムパ・デシュク（1122-1192）の本地である極楽浄土での菩薩ロドー・ニンポの名が言及されることから、その系統にも属する人でもあるようである。

12) *rNam dag bDe ba chen zhing gi smon lam gyi 'grel bshad Thar lam snang byed*. これは、bKra shis [1994] *smad cha* に収録されている。以上二つの註釈書による『清浄大楽国土の誓願』の科文は、藤仲 [2006] pp. 97-101 に和訳しておいた。

13) 七支供養は元来、『華嚴經入法界品』の末尾の「普賢行願讃」に出るものである。「普賢行願讃」については中御門敬教氏が研究を継続中である。この行法は、『同経』をしばしば典拠にしたシャーンティデーヴァの著『入菩薩行論』Ⅲの冒頭にも、より簡潔な形で出ており、菩薩戒の二大流儀の一つであるシャーンティデーヴァ流の前行において欠かせない項目である。チャクメーも当然、これらを学んだわけである。cf. ツルティム・藤仲 [2005] pp. 127-129; [2007] pp. 164-173

14) これはシャーンティデーヴァのもう一つの著『集学論』（D No. 3940 Khi 89b7-90a1; Bendall ed. p. 160; 大正32 No. 1636 p. 107a）に引用された〈説四法経〉（D mDo-sde ↗

の主要部分ともなっている一ちなみに、四力に基づいて懺悔を行うこの形式は、〈説四法経〉を引用した〈集学論〉に始まり、インド後期からチベットの仏教、例えばゾンカパ著や彼に始まるゲルク派においても盛んに行われる¹⁵⁾。第三、第四の項目は様々な祈願の反復であり、その内容は、横死をなくし、臨終時に来迎を受けることから、極楽往生して阿弥陀仏を拝顔し、授記を受け、利他を行うこと、阿弥陀仏の入滅時には観自在、大勢至に従うこと、成仏して無量寿仏のようになり、聞名の功德により有情を利益することにまで渡る。それらの成就を三宝に祈願し、礼拝の功德を説明し、最後にこの著作は〈無量寿経〉〈阿弥陀経〉〈悲華経〉〈鼓音声陀羅尼経〉などの意趣であると結んでいる。

参照した版と凡例

(Toh.) Toh. 7018, Folios 1–17 (*A Catalogue of The Tohoku University Collection of Tibetan WORKS ON BUDDHISM*, 1953による、東北大学所蔵本)。東洋文庫蔵チベット蔵外文献 Ref. No. 0584 (1a1-17a6), 東洋文庫蔵チベット蔵外文献 Ref. No. 0723 (1a1-17a6) もまた同一のものである。

(東洋) 東洋文庫蔵チベット蔵外文献 Ref. No. 3125, bDe-smon. 1a1-12b4 ; この本の表題は Chos spyod mdor bsdus/dang mkhas grub Rāga a syas mdzad pa'i bDe chen smon lam/skyabs 'gro'i lo rgyus bcas ba bzhugs so// となっていて、前に『法行要略 Chos spyod mdor bsdus』(1a-10b6), 後に『帰依の経歴 sKyabs 'gro'i lo rgyus』(1a1-8a4) を伴うほか、この願文の中にも『略誓願 sMon lam bsdus pa』(13a5-b6) としてミギェル・ドルジェの願文とその奥書が収録されている。cf.『浄土教典籍目録 パイロット版』(2010) pp. 84–85

(PS) ドイツ語での研究翻訳である Peter Schwieger, *Ein tibetisches Wunschgebet um*

↘ No. 249 Za 59b1-2) に基づく浄化法であるが、もちろんこれによる罪業の浄化が説かれるのは、大乘においてだけである。『チム俱舎論釈』VI (cf. 小谷 [1995] pp. 250–251) には、「上の乗（大乘）の者たちは、四正断は対治の四力の自性である。〔すでに〕生じた罪を断ずるのが、依処の力と能破の力。〔いまだ〕生じていないのを摂持させないのが罪過の遮止の力。〔善に関する〕後の二つは対治現行の力である、と主張なさります。」という。

15) cf. 白崎 [1989] には、ギェルツァブ・タルマリンチェン (rGyal tshab dar ma rin chen. 1364–1432), イェシェー・ギェルツェン (Ye shes rgyal mtshan. 1713–1793), カルマ・ネードゥンテンギェー (Kar ma nges don bstan rgyas. 1770–?), ロサン・ペルデンテンペーニマ (パンチェンラマ四世. Blo bzang dpal ldan bstan pa'i nyi ma. 1781–1854), ジャンチェン・ドゥペードルジェ (dByangs can grub pa'i rdo rje. 1809–1887), ロサンタディン (Blo bzang rta mgrin. 1867–1937) による、『菩薩堕罪懺悔経』を原拠とした著作が報告されている (cf. 同 [1989] pp. 97–98)

Wiedergeburt in der Sukhāvātī (St. Augustin, 1978) の末尾に、影印で掲載されたもの。同書 p. 40を参照。同書末の影印版は同書が参照した四つの刊本のうち、D すなわち Dr. Schuh, Bonn 所蔵のものであるという。

(祝) 『*bDe smon phyogs bsgrigs, sTod chad*, 祝詞集 上冊』(bKra shis ed.; Si khron mi rigs dpe skrun khang 四川民族出版社, 1994) pp. 217–232

(宗) 宗川宗満「完全清浄極楽国土誓願」(『浄土学』5・6, 1923)

科文は、ジクメー・チョデンパないしトゥクジェ・シャンベン・ペルサンによる註釈『清浄大楽国土の誓願の弁別釈・大楽国土へ往く善き階梯 *rNam dag bDe ba chen zHING gi smon lam gyi 'byed 'grel bDe chen zHING du bgrod pa'i them skas bzang po*』(Toh. No. 7019; 以下、『弁別釈』と略称する) によるものである。その和訳はすでに発表したが、今回、多少手直しをした個所もある。

なお太字の個所は、ゲェルケンボ著『*bDe ba gyi zHING gi mdo* 極楽国土経』に出てくる部分である。その和訳は中御門〔2009〕を参照。

本文和訳

(Toh. 1a) (PS1a) (東洋1a) (祝217) (宗643)

ケードップ・ラーガスヤが造られた『清浄大楽国土の誓願』というものが在す。

(PS1b) (東洋1b)¹⁶⁾ オーム, アミターバに帰命します。フリーヒ¹⁷⁾。

〔序〕

16) 論書の冒頭には帰敬偈とその著作の目的、関係などを述べるのが通例である。ジクメー・チョデンパによる『弁別釈』の冒頭部分に次のようにいう—

「(1b) 師アミターバに帰命します。御名が耳に一回聞こえたことでも、極楽〔浄土〕の安楽な住処に導かれる。千の光の相が燃える勝者—仏子をともなったものは、〔五〕濁〔の世〕の哀れな衆生たちを大悲でもって照覧してください。

学者・成就者の自在者カルマ・チャクメーのお口の妙瓶から来る極楽願文の (2a) 弁別釈 (※) — 自他への利益の願望をもって、無比の師の口伝をここに提示します。それもまた、財物なしに利益したい知恵を持った者たちは、優劣の集会の中央において法座において、継続的な行が済んだ後、このように述べるべきです—「ああ、虚空と等しい有情 (2b) すべてに正等覚者〔たる仏〕の位を得させよう。そのために甚深なる正法を聞いて、〔その〕義を行持しよう」という—〔そのような〕清浄な動機と、法を聞く行動もまた、諸々の〔顕教の〕経・〔密教の〕タントラに説明されたとおりに明瞭にして聞こう」。

そして、「経 (mdo) において早道は、この『清浄大楽国土の誓願』です」と述べている。※) この記述から、内容はチャクメー自身の口述であるとしても、彼自身の註釈ではなく、弟子による著作であることが分かる。序論の11)を参照。ちなみに地域は異なるが、中国における智顗説・湛然略『維摩経略疏』(『大正蔵』39, No. 1778), 智顗説・灌頂録『金光明経玄義』(『大正蔵』39, No. 1783), 智顗説・灌頂記『菩薩戒義疏』(『大正蔵』40, No. 1811) のような形態であろうか。

17) これは阿弥陀仏の種子である。

18) [1. 説明されるべきことの支分 cf. 『弁別釈』 2b1]

(Toh. 1b) これこそは、無執着 [なる私チャクメー]¹⁹⁾ の修証²⁰⁾ の蔵 [である]。[私は自己の] 手でまた努力して書きました。ああ、多くの者に利益すると思いました。(PS2a) [この願文の] 写本²¹⁾ を欲するものがあるなら、貸し与えてください。これより大きな利徳は無い。これより深い教誡は無い。私 [チャクメー] の法の根本です。勝手に放らないで、実践に努めてください。(PS2b) これは [顕教の] 経の宗²²⁾ であるから、[伝統の師からの] 伝授²³⁾ を得ていなくても、唱えるにふさわしいのです。

18) 冒頭の部分は、小野田 [2000] pp. 4-5に紹介されている。

『弁別釈』には、「説明されるべきことそのものの義」に入る前の支分として次のようなことを述べている—清浄な利他の動機を明確にすべきである。すなわち、輪廻する有情すべては大恩ある父母であり無量の利益をしてくれたが、彼らは悪業の果として悪趣、特に地獄で苦しみつづけるので、彼らは哀れむべきである。彼らはみな最終的に正等覚者になるし、そうならない間は極楽浄土で無量光仏に会えるようにと願って身語意の善に勤めるべきである。その善根を一切の有情が究竟的に正等覚し、当面に極楽往生する因として廻向すべきである。と。これらは三つは大乘の三つの根本とされている。そして、現在、敵のように見える者も、かつての自己の悪業が自己に巡って加害するのであるから、すべての者が極楽往生することを願って勤めるべきであること、そしてそのような善い思惟こそに仏道は掛かっていること、父母の恩はどのような財物や行動によっても報いがたい大きなものであるが、最高の報恩は直接的には父母を仏門に導き入れること、間接的には自己が正法を修証することである。しかし、供養のための浄財を徒に受用することは恩に報いることにならないだけでなく、罪過が大きくて、父母に溶けた鉄水を与えるのより比較にならない大きな苦を与えるようなものである、と。

父母への報恩に関して、チベットではインド伝来のことが教えられている。すなわち、因果を撥無する邪見の一つとして「父母はいない」ということ、十悪業は父母に対して行ったとき特に重いこと、供養して功德があることなどのように、三宝や師とともに重要視されるほか、無始の輪廻において一切有情は父母にならなかった者は無いので菩提心を起こすには、今生の母、次に父などを基本に据えて、順次一切有情の恩を念ずることなどである。

19) 著者の名 Chags med を読み込んだ表現である。ちなみに「国土の選択」では、弥勒の兜率天に生まれることを願うのなら、『弥勒誓願』の無執着な実践をするよう勧めており、チャクメー自身も七年間そのように行ったが、今は輪廻の苦を見て、生死の苦におののくので、『弥勒誓願』を置いて、『極楽願文 bDe smon』を唱える、と述べている。またその最後の部分では、『極楽願文』のみを修証し、無量光仏と観自在菩薩のみを成就し志願するよう勧めている。cf. 藤仲 [2006] p. 70, p. 87

20) thugs dam 宗川訳は「正意」とするが、『蔵漢大辞典』p. 1167には、1) 誓願、聖言、2) 修証、行持、3) 占い、4) 本尊、といった意味を挙げている。

21) dpe gcod 宗川訳は「譬喩断案」とするが、よく理解できない。dpe だけでは喩ということであって意味をなさないし、gcod 自体は断ずるということで、断絶したという意味かもしれない。他方、dpe cha の転訛や誤表記の可能性も考えられる。文脈からは、「経本」を欲しい者、といった意味にしか考えられない。その場合、ここの一文は本作の読誦經典としての性格を表したもののといえよう。

22) mdo lugs とは顕教の流儀ということであり、その伝統の師から受法することを絶対に必要とする秘密真言とは異なっているという含意である。そういうこともあってか、ゲルク派の学僧ゲルケンボがこの『極楽願文』から三・四割程度を引用し、部分的に表現を変更して、簡略版『極楽国土経 (bDe ba gyi zhing gi mdo)』を著作した。この「経 (mdo)」は、重要部分・顕教・經典という三つの意味を含んでいる。cf. 中御門 [2009] pp. 245-247。

23) lung とは文字通りにはアーガマであるが、その伝授なしに修行しても果は得られないことが、律の註釈文献にも言われている。チベットではさらに、読み聞かせの伝授、講説の伝授、導きの伝授の三種類に区別されており、大乘顕教の經典や論書についても各々の伝授を継

(Toh. 2a) (東洋 B1b)

〔本文〕

〔2. 説明されるべきことそのものの義—極楽往生の因四つ²⁴⁾ cf.『弁別釈』4b1

2-1. 極楽往生の第一の因—形相をたびたび作意する cf.『弁別釈』4b3

2-1-1. 極楽浄土を作意する cf.『弁別釈』4b4]

(Toh. 2a) ヘマホ²⁵⁾。(宗644) ここ〔釈迦牟尼仏の娑婆世界の国土〕から日が沈む〔西の〕方より、無数の多くの世界の彼方に、〔他と障碍しあうことなく〕少し上に〔勝れた〕聖なる国土〔がある。そこ〕に、清浄な極楽世界²⁶⁾〔がある〕。私の眼球では見

↓承する正師により、その典籍の伝授を受けてこそ、正しく受け継がれる、と考えられている。cf. ツルティム、藤仲〔2005〕pp. 36-41; ところが、このように伝授を受けていなくてもいいということは、伝統の正しい継承という面では問題を含むとしても、逆に多くの人々に門戸を開き、『虚空法 gNam chos』、あるいは特にこのチャクメーの『願文』がチベット仏教圏に広く普及する要因となったと思われる。

24) 『弁別釈』では次のようにいう—

『経』に説明されたとおり、極楽に生まれる因は四つ—1) 形相をたびたび作意すること、2) 福德の資糧を積むこと、3) 正覚へ発心すること、4) 善根を自他が極楽に生まれる因として廻向することです。』

25) インドの感嘆の言葉である。以下の『弁別釈』を含めてここでの記述は、〈無量寿経〉に対応するものがある。cf. 藤仲〔2006〕p. 75 note 83; 『弁別釈』には、「エマホ」は驚くべきという意味だとしてから、驚くべき内容については、過去の時、無量劫の以前に、「世自在王仏」というものは世間に出現なさったとき、「法蔵比丘」というもの—憶念と知慧、証得を具えた、勝利の幢を信解する者が出現して正覚へ発心し、千万（コーティ）年に八十一の百千の千万億（コーティ・ナユタ）の仏の功德と莊嚴を聞いて、それらを一つの仏国土にすべて摂取し、広大な誓願を立てたこと、そのとおりに成就してから、この賢劫までに十の大劫が過ぎたが、それは極楽国土の十日であり、彼は現在もそこに生きておられて、法をも説かれるということをし、挙げています。

26) ここでは bDe chen (大楽) ではなく、bDe ba can と通常の用語が用いられている。また、その位置を単に西方のはるか彼方というだけでなく、娑婆世界と比べて同一平面ではなく「少し上に」というのは、〈無量寿宗要経〉でその国土を上方の「無量功德蔵」とする記述に影響されているかもしれない。というのは、チベットでは、〈無量寿宗要経〉の無量寿智仏は、無量寿仏、無量光仏と全く同一視されているからである。ちなみに漢訳『無量寿経』所説の「十二光仏」には「智慧光仏」が挙げられる。仏名中の「光」が「智慧」と関係付けられる事例である。cf. 池田〔1916〕p. 558; 高田〔1978〕p. 214; また yul sa na とあって「聖なる国土に、清浄な極楽世界」となるが、これは韻律の関係からであり、本来は「国土」すなわち「清浄な極楽世界」と理解すべきかと思われる。

『弁別釈』には、一般的に仏国土には、器世間が浄らかでも有情世間が浄らかでないものと、有情世間が浄らかでも器世間が浄らかでないものと、両世間が浄らかでないものと、両世間が浄らかであるものとがあるが、極楽国土は有情と器の二つともきわめて浄らかであり、苦という名も無い安楽を有するものである。スメール山より高く、シナの皇帝の水晶のレンズでも見えないが、「見えないからといって無いわけではない」といわれるように、といってダルマキールティ著『量評釈』第2章「量の成立」83偈 d を引用する。そして、一切智者である仏（すなわち釈迦牟尼）が説かれたから、その聖教を信認するといひ、自己の明澄な心（すなわち浄信）の側には、例えば、ラサに行かなくても、他者によく問うて、トゥルナン寺にはこのような釈迦牟尼像が有ると思惟して修習するようなものである、という。なお、苦がなく安楽を見えているといった記述は、〈阿弥陀経〉の冒頭に出ている。cf. 『浄土宗全集23 梵蔵和合浄土三部経』p. 342; また信受については、〈阿弥陀経〉の六方段の諸仏証誠の個所にそれを勧めているのが見られる。

えないが、自心の明瞭な（PS3a）意において燦然と明らかである²⁷⁾。

〔2-1-2. そこにおられる勝者および仏子を作意する cf.『弁別釈』6a3

2-1-2-1. 正尊を作意する cf.『弁別釈』6a4〕

そこに世尊・勝者・無量光²⁸⁾〔という仏がおられる一身体は〕紅蓮華の色を（Toh. 2b）して〔紅蓮華のスメール山を千万（コーティ）の朝日が抱いたような〕光輝が燃える。〔その身体は〕頭頂に〔他者により見られない〕頂髻、御足〔の裏〕に輪〔相〕など〔大人を表す〕三十二の妙相、〔内の功德を示す〕八十の随好により（祝218）飾られている²⁹⁾。お顔は一つ、手は二つで、禪定〔印を結び〕、〔その上に、無死の智慧の甘露で充たされた〕鉢を（PS3b）持つ。〔青の上衣、赤黄の重複衣、赤の下衣という〕三種の法衣を召して、〔両足を組んだ金剛〕結跏趺坐により、〔その上に種々の〕千の蓮華を具えた〔ところの、白の清涼な円かな〕月〔輪〕の座の上に、菩提樹に背を（東洋2a）寄せておられる。悲（あわれみ）の眼でもって遠くから私を見ておられる³⁰⁾。

27) cf. 中御門〔2009〕p. 255, ギエルケンボ（1b1-2）

28) 『弁別釈』には、「広大な国土において身の光でもって照明なさるので、無量光または無辺光、寿命は無量劫に住されるので、無量寿」という。このような記述は、〈阿弥陀経〉の仏名を説明する個所に出ている『浄土宗全集23 梵蔵和合壁浄土三部経』。p. 346

ここに出ている姿のうち、紅蓮華の色、一面二手で禪定印を結び、そこに鉢（無死の甘露で満たされたもの）を持つといった姿は、密教での成就法文献に見られる阿弥陀仏の姿である。cf. 藤仲、中御門〔2004〕p. 53 note 23, p. 61 note 45；ただし、本願文では後で仏の色について「金色」などとも出ている。これは法蔵菩薩の「悉皆金色」を願う蔵訳の第3願などに基づくものであるが、この願文では密教での阿弥陀仏の紅蓮華色や金剛手の青色などといった記述が平行して用いられている。それは『阿弥陀経』や『無量寿経』の極楽浄土の莊嚴で種々の色が説かれているのと類似した方向と言うべきか。

『弁別釈』には、月輪座はスメール山ほど大きな八羽と小さい無数の孔雀により支えられており、その上には千葉の蓮華を具えていること、白の清涼な円かな月輪座の上に、菩提樹—それを根識により見聞など領納するだけで無病になり、作意するだけで等待が生ずるものであり、月のような光明の宝珠、シャクラの心臓の宝珠、如意宝珠など、宝のスメール山と莊嚴・数珠、金と真珠の宝の網、鈴、小鈴などにより莊嚴された巨大な菩提樹—高さは千六百由旬、枝葉は八百由旬以内を覆い、根のまわりと長さは五百由旬のもの—があることを説き、そのもとに背を寄せて坐った阿弥陀仏が大悲の慧眼によりはるか遠くの極楽から、私を照覧なさってください、という。これら莊嚴の記述は、〈無量寿経〉蔵訳の第28願や「東方偈」の直後に見られる。cf. 『浄土宗全集23 梵蔵和合壁浄土三部経』pp. 246, 292-294

29) 阿弥陀仏の身体的特徴については、藤仲、中御門〔2004〕pp. 60-61 note 45; 極楽浄土の住人が三十二相を具えていることについては、藤仲〔2006〕p. 81 note 101；相好についてはチベットでは『現観莊嚴論』Ⅷ、『宝性論』Ⅲ、龍樹著『宝鬘（宝行王正論）』Ⅱなどの記述が有名である。

30) cf. 中御門〔2009〕pp. 255-256, ギエルケンボ（1b2-4）

参考資料「*gNam chos* 虚空法」の浄土教関係の重要典籍

ミギル・ドルジェの著作

彼の著作で *gNam chos* と題されているもの (TBRC Volume number 1662–1674, TBRC Work Number 21578) は、全13巻で各々が数多くの作品に分かれている。これらは様々な尊格、儀軌に渡っており、そのうち第1巻 *Tshe dpag med kyi them byang 'od zer rnam 'byed rin po che'i phreng ba* は特に阿弥陀仏関係であるが、そこには密教の成就法が多く含まれている。未調査なので断言はできないが、通例として、成就法の祈願においては以下のような簡潔な願文が用いられているようである。わずかであるが、解説した重要なものを紹介しておく。

・ *gNam chos bDe smon* (虚空法の極楽願文)

『虚空の法、御心の埋蔵、甚深耳伝の類』から『大楽国土の成就法』を取り出した部分』(東洋文庫蔵チベット蔵外文献 Ref. No. 695, Folios. 1a1-10a3) の奥書の直後に「虚空法、光明儀軌の廻向」として掲載されている。活字本 *bDe smon phyogs bsgrigs stod* (四川民族出版社, 1994) pp. 214–215 には単独で出ている。内容は、大乘の仏道修行全般に関する4偈頌の願文である。後半の第3, 4偈において死後に極楽往生することと、往生後に正覚し、変化により利他を行うことを祈願している。

・ *gNam chos bDe smon* (虚空法の極楽願文)

東洋文庫蔵チベット蔵外文献 Ref. No. 3125, *bDe-smon*. Folios 13a5-b. これはチャクメー著『大楽誓願』の奥書の後に掲載されたものである。チャクメー著『大楽国土への遷移の教誡を広く編纂したもの』(東洋文庫蔵チベット蔵外文献 No. 0700) には導師が唱えて弟子が唱和すべきものとして、極楽への遷移を祈願する個所 (12a4-b3) と、亡者を送り出す個所 (15a5-b3. ただし「私は」が「亡者は」となる) に出ている。活字本 *bDe smon phyogs bsgrigs stod* (1994) pp. 215–216 には単独で出ている。阿弥陀仏三尊に対して、臨終時の来迎と、極楽に往生すること、無量光仏を見ることを祈る4偈の願文である。

・ *gNam chos bDe smon* (虚空法の極楽願文)

活字本 *bDe smon phyogs bsgrigs stod* (四川民族出版社, 1994) p. 216 には単独で出ている。チャクメー著『大楽国土への遷移の教誡を広く編纂したもの』(東洋文庫蔵チベット蔵外文献 No. 0700) には最後の遷移の次第の個所 (16b6-17a1) に、導師に続いて弟子が唱和すべき願文は、これと類似している。阿弥陀仏三尊に対して、極楽に往き、

阿弥陀仏に会うことを願う6句の願文である。

・ *Nam chos thugs kyi gter kha snyan brgyud zab mo'i skor las bDe chen zhing gi sgrub thabs 'don cha* (『虚空の法，御心の埋藏，甚深聴伝の類』から「大楽国土の成就法の唱える部分」)

東洋文庫蔵チベット蔵外文献 Ref. No. 695, Folios. 1a1-10a3。早世したミギェル・ドルジェの遺志をかなえるため，チャクメーが編纂したもの。内容は，無量光三尊などに供養，讃嘆，懺悔，祈願し，撰寿により寿命成就を祈願するが，儀軌には独特の作法も見られる。奥書の後に出る「虚空法，光明儀軌の廻向」「虚空法の誓願」はミギェル・ドルジェの極楽願文である。Kapstein によると，この儀軌はカルマ派の集会で特に月の10日，25日に行われ，最後はチャクメーの極楽願文で締めくくられる。また葬儀への導入にも用いられる。

カルマ・チャクメーの著作（『大楽誓願』以外のもの）

・ *bDe smon bsdus pa* (略極楽願文)

活字本は *bDe smon phyogs bsgrigs stod* (四川民族出版社, 1994) pp. 232-235。『大楽誓願』を約5分の1に要約したもの。内容は，無量光仏とその眷属，極楽浄土の徳性を讃えて，祈願を繰り返すものであるが，極楽往生の四因や七支供養といった構成は無い。

・ *bDe smon bsdus pa* (略極楽願文)

活字本は *bDe smon phyogs bsgrigs stod* (四川民族出版社, 1994) pp. 235-238。『大楽誓願』を約5分の1に要約したもの。これもまた，無量光仏とその眷属，極楽浄土の徳性を讃えて，祈願を繰り返すものであるが，極楽往生の四因や七支供養といった構成は無い。

・ *bDe smon bsdus pa* (略極楽願文)

活字本は *bDe smon phyogs bsgrigs stod* (四川民族出版社, 1994) pp. 238-240。同著者の極楽願文類のなかで最も短い。内容は，六道や現世の苦や困難を述べて，それらが克服されて善が成就されること，自他が極楽往生できて，往生後にも利他行を行うことを祈願するものである。無量光仏や極楽浄土の功德の記述はわずかであり，それらを述べた別の典籍の存在を前提としているようである。

・ *bDe chen zhing gi ro sreg cho ga ngan song gnas 'dren sdug bsngal mtsho skem gtan bde rab 'bar* (大楽国土の火葬儀軌—悪趣の処を導くもの，苦の海を乾かす永久の安楽の照耀)

東洋文庫蔵チベット蔵外文献 Ref. No. 0698, Folios 1a1-16a5では、ミギェル・ドルジェの著作とされている。唱えるべき文言と割注の解説からなり、『大楽国土の成就』(Ref. Nos. 695, 709) から数カ所の引用や、「浄化儀軌 Byang cho ga」(同著『大楽国土の成就法の備忘録』Ref. No. 0699, 2b5-3b4に關係するか)への言及がある。樹木の乏しいチベットでは火葬は少数の高位の人しか行わないので、珍しい。まず『国土の成就』より浄化を行い、自己を無量光仏だと修習する。火天を招き、護摩を行い、大楽国土の無量光仏など諸尊を見るよう祈願する。無量光、觀自在、勢至を供養し、真言を唱えて死者の来世の息災、幸福などを祈願し、死者の引導、地道の成就、生者の障碍の除去を祈願する。

・*bDe chen zhing du 'pho ba'i gdams pa rgyas par bsgrigs pa* (大楽国土への遷移の教誡を広く編纂したもの)

東洋文庫蔵チベット蔵外文献 Ref. No. 0700 (= No. 0714), Folios 1a1-17a4。本著は『虚空法、御心の埋蔵』に所属するものとされ、死去のときどこに行くかと生前にそれを予行演習する行法である。三身による遷移(ポワ)の理論や、無量光仏の瓶の甘露、識、精滴の移動を觀想した実践方法、成果の兆候など説明も詳しい。冒頭の法の伝承は、ミギェル・ドルジェの出現や過去世の修行、未来世の成仏についての予言、彼が13歳のとき無量光仏から授かった法類について述べ、これは遷移(ポワ)の法のなかでも新鮮で加持が大きく、パドマサンバヴァによる怠惰な者のための教誡、臨終時に罪人も成仏できる強烈な法であり、利徳が大きいという。極楽に遷移して直ちに見仏できるよう誓願を唱える箇所、他者に対して行う場合、その眷属すべてと亡者の身が光へ、無量光の心臓へ溶けると觀想し、極楽往生を祈願する箇所、自らの識のフリーヒ字が無量光の心臓に移ると觀想し、往生の誓願を立てる箇所、ミギェル・ドルジェの極楽願文ないしその文言を一部改めたものが使用される。

＊参考文献は、中御門敬教「カルマ・チャクメーの極楽願文『清浄大楽国土の誓願』の和訳と研究—觀自在、大勢至の両菩薩と極楽浄土の莊嚴と供養の段—」に一括して示した。

(ふじなか たかし 嘱託研究員)

2010年11月19日受理

〈Summary〉

A Japanese Translation and Study of *rNam dag bde chen zhing gi smon lam* (bDe chen smon lam) by Karma Chags med: Introduction and, the Prologue and the Descriptions of Amitābha

FUJINAKA Takashi

bDe-chen-sMon-lam (Prayer-for-the Sukhāvati) by Karma Chags-med (skt. Rāgāśya. 1612–1678), a scholar, master-practitioner of bKa'-rgyud-pa and rNying-ma-pa tradition, is the most famous and influential bDe-smon (Prayer-for-the Sukhāvati) in Tibetan Buddhism, as well as *Zhing mchog sgo 'byed* by Tsong-kha-pa Blo-bzang-grags-pa (1357–1419), a founder of dGe-lugs-pa tradition. *bDe-chen-smon-lam* belongs to a group of concealed scriptures *gNam chos*, which were revealed by Amitābha-Buddha himself, to Mi-'gyur-rdo-rje (1645–1667), a young protégé sprul-sku. This have been an very important prayer to be recited at dharma-events and funerals by the monks of this tradition, and other lay-practitioners in general, and had influences culturally. In this paper, I have discussed this Prayer as a whole, and translated and studied, in cooperation with Mr. Nakamikado, the prologue and the descriptions of Amitābha to be meditated upon and worshiped.

Key words: Karma Chags med, bDe ba can gyi smon lam (bDe smon), gNam chos, *rNam dag bde chen zhing gi smon lam* (bDe chen smon lam), Mi 'gyur rdo rje